

こはいみじき絵本かな — 『たかこ』との出会い—

杉山 亜里紗（学校カリキュラム開発専攻）

一昨年の夏ごろであろうか、私は本屋に立ち寄った。その本屋では入り口付近に絵本や児童書のコーナーを設けている。いつもならそこを素通りしてしまうのだが、その時は陳列されている絵本の一冊がたまたま目に入った。表紙に描かれているのは、大きな顔に丸型の眉、額を広く出した黒い髪の少女。手に持った扇で少し顔を隠して、色の異なる着物を何枚も重ねて着ている。私達が「平安時代の女性」と言われてパッと思いつく容姿だ。

彼女こそ、今回紹介する絵本のタイトルにもなっている主人公の「たかこ」である。彼女のこの外見は、日本文学を専攻している身として放ってはおけない。中を見ると、平安時代の人物と思われるたかこが現代の小学校に転校してきて、文化の違いからクラスメイトに異様な目で見られるものの、彼女がクラスのピンチを救ったことで最終的には打ち解けて仲良くなったというストーリー。全文が平仮名で書かれており、舞台も小学校。描かれている教室には「3-1」の看板があることから、小学校中学年くらいが対象だろうか。正直な所、ストーリーだけでは面白い本であるとは言いがたい。盛り上がりや魅力には欠ける部分があるように感じる。たかこは何者なのか、過去からやってきた人なのか、このまま現代で生活をするのか、などは一切説明がなく謎であるため、このような部分に疑問を感じる読者もいるだろう。クラスメイトにからかわれて次第に孤立するたかこに対し、心配する素振りを見せるのが語り手の「ぼく」だけであるのも悲しい。

しかしこの本の最大のポイントは、たかこの台詞が古語で書かれていることである。たかこが転校してすぐに「ぼく」と行ったやりとりは次のようなものだ。

たかこは ぼくの
となりの せきに すわった。
「よろしく」
ぼくが いうと、

たかこは
「こころやすく
ならむ」
と いった。

「こころやすくならむ」は「仲良くなりましょうね」とでも捉えればいいたろうか。登場人物が古語で話す絵本というのは、今までに前例を見たことがなかった。私はしばらくしてこの絵本を購入し、更に図書館が主催する選書ツアーでも『たかこ』の購入を希望して所蔵してもらうことにした。

普段絵本など買わない私が『たかこ』を買ったのは、元々古典に興味があるためと、古語を用いた斬新さに心惹かれたためである。学習指導要領の改定により小学校の教科書にも古典作品が掲載されるようになったが、この絵本は伝統的な言語文化の授業の導入に用いることができるのではないだろうか。また、たかこの言葉から児童が古語に興味を持つかもしれない。教科書で古語を読むといかにも勉強という感じで苦手意識を抱いてしまう子がいても、絵本ならば読みやすく古語に触れることができるのではないだろうか。私はこの絵本に様々な可能性を見出して、ぜひとも自分の手元に置いておきたいと思ったのである。

このように、ストーリーばかりにとらわれないのが絵本の良さのひとつであると考えられる。『たかこ』の場合は主人公の言葉遣いが他にはない武器と言えるだろう。また、この作品は絵本であることによって、たかこが他の子どもと異なるのだと視覚的にもわかるようになっている。私にとって『たかこ』は絵本の魅力を再発見できる一冊であった。何となく目に入ったことからこのような興味深い絵本と出会ったとは、嬉しい偶然があるものだと思う。

清水真裕・文 青山友美・絵『たかこ』（童心社 2011年）